

氏名(本籍)	渡 辺 弥 生 (大阪府)				
学位の種類	教 育 学 博 士				
学位記番号	博 乙 第 501 号				
学位授与年月日	平成元年 3 月 25 日				
学位授与の要件	学位規則第 5 条第 2 項該当				
審査研究科	心 理 学 研 究 科				
学位論文題目	幼 児 ・ 児 童 に お け る 分 配 の 公 正 さ に 関 す る 研 究				
主 査	筑波大学教授	教育学博士	高 野	清 純	
副 査	筑波大学教授	教育学博士	加 藤	隆 勝	
副 査	筑波大学教授	教育学博士	杉 原	一 昭	
副 査	筑波大学教授		佐 藤	三 郎	
副 査	筑波大学教授		三 澤	義 一	
副 査	筑波大学教授	教育学博士	市 村	操 一	

### 論 文 の 要 旨

子どもが適切な社会性を身につけていく過程において、「公正観がどのように発達していくのか」、「何をもって公正と判断するのか」、さらには、「公正に行動するということはどのようなことなのか」といった問題は、非常に重要であると考えられる。従来、子どもの公正に関わる心理学的研究は、二つの異なる観点から検討されてきた。一つは、ピアジェ (Piaget) やコールバーグ (Kohlberg) に代表される、認知発達理論の観点から分配における公正観の発達を検討したものであり、発達段階そのものの存在や、特徴の検討に関心が示され、実際の行動との関係が深く検討されていない問題があった。

他方、社会心理学においては、公平理論の枠組みから、分配行動の認知的側面が検討されてきた。その結果、分配様式には公平分配だけではなく、平等分配やその他の分配様式の存在することが見出されてきた。しかし、認知発達段階との関係を検討したものがなく、分配行動が年齢や性といった個体要因ないしは、状況要因によって規定されているかのように考えられてきた。

このように、これら二つの観点からの研究は、互いにその立場を踏襲する傾向が強いため、人間一身体の中で分配行動が導かれるまでの過程を、ダイナミックに分析していないと考えられる。本論文では、これらの観点を統合するアプローチを行い、子どもがいかなる認知的過程を経て、分配行動を決定するのかを明らかにすることが目的とされた。

本論文は、8章からなっている。

第1章では、公正さの意義と、先行研究の概観を通して、この領域における研究上の問題点が検討され、本研究の目的が明らかにされた。

第2章では、公正という概念がどのように発達しているかという認知発達段階の存在と、その妥当性が吟味された。その結果、6つの発達段階が、わが国の幼児や児童において、その普遍性、順序性が妥当なものであることが明らかにされた。

第3章では、公正観の発達を促進する要因が検討された。すなわち、公正観の発達と養育態度、権威概念、役割取得能力との関係が吟味され、その結果、養育態度との関係は有意ではなかったが、権威概念、及び、役割取得との間には有意義な関係が見出された。権威の概念は、公正観と同様に、子どもの社会的、道徳的な相互作用の理解において重要であると考えられるが、公正観が発達するにつれて、権威概念が向上する傾向が認められた。役割取得能力は、対人関係における公正さを考える上で、非常に重要であることが示唆された。

第4章の目的は、第2章で明らかにされた公正観の発達段階が、分配行動をどの程度規定するかを明らかにすることであった。研究結果は、発達段階が高くなるほど、発達段階が分配行動を規定する傾向を示し、認知と行動との一貫性が示唆された。しかし、発達段階が低い場合には、必ずしも行動を規定してはいなかった。そのため、公正観の発達段階以外の要因で、分配行動を規定していると予測される要因との関係や、公正観の発達段階と他の要因との相互作用が分配行動を規定しているのではないかと考えられた。

第5章では、前章で問題となった分配行動の規定要因として、個体要因がとりあげられ、分配行動との関係が検討された。すなわち、①年齢、性差、兄弟数、出生順位、②自己意識、③原因帰属、④共感性、⑤友情が、検討された要因である。その結果、年齢が若いほど、利己的な分配が多いこと、自己意識の低いものに公平分配の割合が高いことが明らかにされた。また、共感性の高いものは、自分の貢献度が高い場合に、自分に多くする分配を避け、平等分配を先行するものの割合が多いのに対して、共感性の低いものは貢献度に応じた分配を行う傾向が見られ、相手の感情に左右されない判断傾向のあることが明らかにされた。友情については、他人への配慮の多いものほど、相手を思いやった分配行動をするものの割合が高かった。

第6章では、分配行動に及ぼす状況要因の影響が検討された。これまで、成人を対象とした分配行動の研究が大半であり、幼児、児童を対象とした分配行動の研究においては、年齢や性差との関係を見たものが多く、状況要因については、包括的に検討されていなかった。ここでとり扱われた状況要因は、①貢献度、②人間関係、③競走、協同、兄弟場面、④貢献度比の大小、⑤分配の立場であった。研究の結果、分配の立場以外のすべての状況要因による影響が有意であった。貢献度については、低貢献度条件下で、公平分配が多く、高貢献度条件下で平等分配が優勢であった。この結果は、自分の貢献度が低い場合に分配の決定権が与えられると、相手に対して一種のひきめを感じることや、相手に良い印象を与えようという動機づけが分配行動に影響しているものと解釈された。人間関係については、相手が他人の場合には、貢献度に応じて自分が報酬を多くとる分配を行うのに対して、相手が友人であると同じにする傾向があり、兄弟の場合には愛他的に分配されるこ

とが明らかにされた。競走・協同・兄弟場面についても、場面によって分配行動の規定されることが示唆され、競走場面では、貢献度に応じた分配がなされる割合が高いのに対し、協同、兄弟場面においては、平等分配の傾向が強かった。なお、貢献度比については、貢献度比が大きいほど、公平分配が多く認められた。

第7章では、これまで見てきた要因が単独で分配様式を規定しているというよりも、要因間の相互作用によるところが大きいと仮定され、個体要因と状況要因との関係、及び、認知発達段階と状況要因との関係、さらには、個体要因、認知発達段階、と状況要因との関係が分配行動に及ぼす影響について検討された。その結果、複数の要因の相互作用によって、分配行動が規定されることが明らかになった。このことは、公正観の発達段階だけが、分配行動を規定するのはなく、個体要因や状況要因による影響も無視することができないことを示しているといえよう。

第8章（終章）においては、こうして明らかにされた分配の公正さに関する心理的過程をふまえて、公正観の発達を促進させる方法や、道徳教育への足がかりを得るため、仲間との相互作用、及び、モデリングによる教育的効果が検討された。そのために、仲間との相互作用を与えることにより、自分とは異なる考えや立場に気づかせ、自分だけの主張が通らない葛藤状態を経験させ、それを解決する機会を与えた。その結果、公正観の発達段階が異なるもの同士を同じグループにした方が、発達段階の向上したものの割合の高いことが明らかにされた。

## 審 査 の 要 旨

本論文は、これまでほとんど科学的なメスを入れられなかった幼児・児童の分配の公正さに関し、intensiveな研究を行ったことに対して高く評価することができよう。特に、次の点に、本論文のoriginalityを認めることができると考えられる。①発達傾向研究と分配行動研究の結びつきが試みられた。②道徳的判断と実際行動との関連に関して重要な示唆が得られた。③分配行動にかかわる複雑な要因間の相互作用が明らかにされた。

研究が広範にわたったため、幾分平板的になったきらいがあり、帰属や共感などもう少し内面に踏み込んだ研究が欲しかったとか、見出された多くの要因の中での比重の検討など、尚研究されなければならない点もなくはない。しかし、分配の公正さというような複雑な行動が研究対象であったことを勘案すれば、それらの問題は今後の研究課題となるべきであろう。

よって、著者は教育学博士の学位を授与するにたると認められる。